

所 感

大 沢 春 一

『となりの芝生は、きれいだ』ということがあるらしいが、我々のちょっとした経験でも、きれいな芝生のところに腰をおろそうとして自分の近くを探しても、なかなか見当たらない。そして、遠くを見ると青々とよく茂っていて、こんもりしている所があるので、そこまで急いで行ったらさほどでもなく、やはり、先刻の場所がよかったと感じたことは、一再ならずあった。

どうも私達の仕事なり、会社なりの中で、また、友人等との比較においても、これに似た経験もあるように思える。企業間の関係に少し触れてみると、なるほど、現在のような社会経済体制のもとでは、「競争は競争を殺す」という資本主義の方向づけが、やはり、いなめない以上、たえず企業優劣の変動がある。ある分野で、その優位にたったものは、えてして我々の目には、ある影を与えるであろうが、要は、我々にもその優位にたつチャンスは十分あるし、そのチャンスをもものにする Vision を持ちながら、かつそれを実現して行く道程、経過が重要である。特に社外の動き（外国のそれをも含めて）を参考にはしても、つまり、目を奪われることはなく、自らのペースで研究、調査、企画、実施に急がず、休まず努力することが最も重要なことではないだろうか？

もとより研究、調査、企画なるものは、技術といわず、事務といわず、ある一定期間内に、あるまとまった結論を得なければならない。これはなかなか骨の折れることである。だが、よりむつかしいのは、その得られた結論に対する評価である。不当な過少評価は、担当者をして意欲をなくさせるし、過大な評価は企業を危うくするということは、歴史が十分教えている。スイスのC I B A社では、やむなく技術系のその評価を工業権の取得如何に求め、事務系のそれについては、社内である種の評価委員会をもっているようである。

どこの企業にも、長所もあれば短所もあるが、その短所のよってきた原因の多くは、長所の原因と裏おもてとなる場合が多いが、私等年輩者が過去においてなした上述の評価、さらにこれを実行に移したことによるものが多いとされている。当社の場合も例外ではなからうが、それだけに1人1人が自ら受け持つ分野では、会社の大黒柱になる矜持をもって、まっしぐらに努力するならば、徐々に短所を直していけると思う。

『となりの芝生はきれいだ』とのことわざをかみしめるとともに、私自身、より多く、職責を感じて努力を続けてゆきたい。共鳴される多くの方々と手をつないで。

(取締役 人事部長)